

2022. 10. 16 (日) 使徒4:36~5:11

4:36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ（訳すと、慰めの子）と呼ばれていたヨセフも、

4:37 所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

5:1 ところが、アナニアという人は、妻のサッピラとともに土地を売り、

5:2 妻も承知のうえで、代金の一部を自分のために取っておき、一部だけを持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

5:3 すると、ペテロは言った。「アナニア。なぜあなたはサタンに心を奪われて聖霊を欺き、地所の代金の一部を自分のために取っておいたのか。

5:4 売らないでおけば、あなたのものであり、売った後でも、あなたの自由になったではないか。どうして、このようなことを企んだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

5:5 このことばを聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。これを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。

5:6 若者たちは立ち上がって彼のからだを包み、運び出して葬った。

5:7 さて、三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。

5:8 ペテロは彼女に言った。「あなたがたは地所をこの値段で売ったのか。私に言いなさい。」彼女は「はい、その値段です」と言った。

5:9 そこでペテロは彼女に言った。「なぜあなたがたは、心を合わせて主の御霊を試みたのか。見なさい。あなたの夫を葬った人たちの足が戸口まで来ている。彼らがあなたを運び出すことになる。」

5:10 すると、即座に彼女はペテロの足もとに倒れて、息絶えた。入って来た若者たちは、彼女が死んでいるのを見て運び出し、夫のそばに葬った。

5:11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。

#### <説教>

先主日には、初代キリスト教会の人々の信仰生活、教会生活の姿から学びました。一人ひとりが、金であれ物であれ、自分の持ち物に対する執着心や利己心から解放されました。教会の中に一人も乏しい者がいないように、地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置きました。〈使徒たちの足もとに置いた〉とは「教会に献げた」ということです。そして、その金が必要に応じてそれぞれに分け与えられたのでした。ですからこのことは、金持ちが貧乏人に施してあげるというような個人的な慈善としてなされたものではありません。お金は神に献げられたものとして教会が受け取り、主イエス・キリストの名によって教会からそれぞれの必要に応じて分け与えられたのです。おそらく人々は〈使徒たちの教え〉として聖書から「やもめ、みなしご、貧しい者たち等を虐げてはいけません。よく顧みるように。」と改めて教えられたことでしょう。また、「自分の財産を売って施しをなさい。…あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです。」(ルカ 12:33,34)との主イエスの言葉も教えられたことでしょう。また、「あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。…そのうえ

で、わたしに従って来なさい。」というイエスの言葉を聞きながらそれができずに悲しみながら立ち去った金持ちの青年のこと（マタイ 19 章、マルコ 10 章、ルカ 18 章）も聞いたでしょう。そういう教えを聞いたなかで〈地所や家を所有している者はみな〉神への信仰と感謝と喜びをもって、自由に、自発的にそれを売り、その代金を神に献げるべく〈使徒たちの足もとに置いた〉のです。つまり彼らは「金や物を捨てる」以前に何よりも「自分を捨てる」ことを教えられ、神への信仰の従順をもって実践したのです。

そんな神への良き献金者の代表者として、〈キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ（訳すと、慰めの子）と呼ばれていたヨセフ〉（4:36）の名をルカは挙げました。彼も自分が〈所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置きました〉（37）。このあとのアナニアとサツピラの出来事との対比からして、バルナバは畑を売った代金の「全額」を献げたに違いありません。なお、このバルナバは、後には回心後のサウロ（後にパウロ）を教会が受け入れかねていた時にサウロを弁護し教会が受け入れるように尽力した人です（9:26,27）。また更に後に彼は教会によってエルサレムからアンティオキアに派遣され、タルソにいたサウロを同労者としてアンティオキアに連れて来ました（11:22-26）。そしてやがてはサウロと共に「第一次伝道旅行」に派遣されることにもなります（13 章）。ルカはそんなバルナバを前もってここで紹介しておこうと思ったのかもしれません。

そんな素晴らしい「献身者」が大勢起こされ、権力者たちの脅迫にも屈せず、聖霊に満ちて神のみことばを語り、恵みに満ち、祝福された初代教会でした。しかし、そのことを神の敵であるサタン、悪魔は苦々しく思い、怒り狂い、神と人への憎しみをもって攻撃して来ました。初代教会もやはり不完全な、なお罪深い人間の集会でもありました。〈サタンに心を奪われ〉惑わされる人々がいたのです。それがアナニアとサツピラ夫婦でした。本当なら二人で〈心を合わせて〉神に従うように協力すべきでした。また、もしどちらか一人が罪を犯したら、または罪を犯しそうになったら、もう一人はそれを止め、悔い改めるように諫めなければなりませんでした。しかし二人は、頑なにそうはしませんでした。結局、記されているように、二人はどちらもペテロのことばを聞くと倒れ、息絶えたのでした。もちろんそれはペテロが殺したのではなく、神によることでした。それほどまでの神の審判を招いた二人はどんな罪を犯したのでしょうか。

二人は〈聖霊を欺〉いた（5:2）、〈人を欺いたのではなく、神を欺いた〉（5:3）、〈主の御霊を試みた〉（5:9）とペテロは見抜き、指摘しました。「欺く」とは「偽りを言う、嘘をつく」ということです。〈代金の一部を自分のために取っておき、一部だけを持って来て〉（5:2）、「地所をこの値段で売りました。」と言う（5:8）ことは、明らかに嘘偽りです。人に嘘をつき、だますことはできても、人の心の中の隠された思い、動機、目的、そのすべてを知っておられる神の目をだまし、ごまかすことはできません。曲がり形（なり）にもキリストの教会、神の教会に連なっていた二人がそんな基本的なことを知らなかったはずがありません。そのうえで、わざわざ、故意に偽りを行い、偽りを口にしました。そのように罪を犯したら本当に神はお怒りになるのか、罰をお下しになるのか試してみようと言わんばかりの態度でした。お優しい天のお父様がまさかそんな厳しいことをするはずはないですよ、と言わんばかりの、神への挑戦、侮りと言ってもいいでしょう。

また、「一部を自分のために取っておく」（5:2,3）と訳された言葉は、テトス 2:10 で「(奴

隷が主人のものを盗む」と訳されています。つまり二人の罪は「神のもの」である〈地所の代金〉を盗んだことでした。そもそも二人が〈土地を売〉ったのはその代金を〈使徒たちの足もとに置〉く、つまり神に献げるためでした。そしてそれは「神の恵み」として教会の貧しい人々に分け与えられるものでした。ですから二人の罪は「神のもの」に手をつけ、盗んだ罪、ちょうど昔アカンが〈聖絶のもの〉すなわち神のものを盗んだ（ヨシュア記7章）のと同じ罪を二人は故意に犯したのです。それはいわゆる「出来心で」というようなものではなく、夫婦二人で互いに〈承知の上で〉(2)、〈心を合わせて〉(9)、罪を計画し、実行したのです。それでもその間、聖霊は聖書と使徒たちの教えを通して二人の良心に語りかけ、止めるように、悔い改めるように呼びかけておられたはずですが。しかし二人はその聖霊の促しに故意に耳を塞ぎ、逆らったのです。サツピラには「あなたがたは地所をこの値段で売ったのか。私に言いなさい。」との言葉によって、悔い改めの促しさえなされていたのです。しかしそれも無駄でした。二人はそうやって主イエスと主の教会の〈信頼を裏切った〉（ヨシュア 7:1）のです。それでアカンとその家族に下されたのと同じような神の厳しい、即座のさばきが二人にも下されたと考えるほかありません。

そして二人がバルナバを意識していたことも大いにあったでしょう。自分たちもバルナバのように「慰めの子」などと呼んでもらいたい。「あの二人は信仰によって自分の土地を売ってその全額をささげたそうだ。なんと素晴らしい。」という評判、名声が欲しかったのでもありましょう。しかしそれもまたサタンの惑わしであり誘惑でした。

二人の罪はもちろん今の私たちは絶対に犯さない罪ではありません。はっきり言えば私たちも似たり寄ったりの罪深い者です。二人のような嘘、盗み、貪り、虚栄の心と行いは私たちのものでもあります。〈私の罪は いつも私の目の前にあります。〉（詩篇 51:3）私たちは神の目の前には罪ある者です（同 51:4）。即座に息絶え倒れることがないでいられるのは、その間に悔い改めるようにとのただ神のあわれみであり、主イエスのとりなしのおかげです。今日〈このことを聞いた〉私たちも〈大きな恐れ〉を覚えて、ますます自らの罪の自覚し、それでも聖霊がお住まいになる神の宮である自分自身と教会であることを覚え、神の前に襟を正し、神の恵みに相応しく答えて歩んでいきたいと願います。